

講義は何を伝えるか

大谷 奨

筑波フォーラム編集委員

人間総合科学研究科・アドミッションセンター准教授
(おおたに すずむ／教育制度学)

教育、とりわけ大学や学校で展開される組織的教育活動は、教育する者からされる者へ、知識や技能が伝授されるというモデルを前提として進められている。その自明性について私たち教員はあまり思いをめぐらせることはない。

しかし思い出してみると、かつて机を並べて受講した学友は、受講科目の成績もさりながら、先生の物まねをさせると本人以上にそっくりで、彼の一芸は仲間内のコンパには欠かせなかった。「学ぶ」とは「まねぶ」に由来しているといわれるが、もしそうならば、彼もまたその先生から確実に何かを学んだことになると言えないだろうか。

学生は教員から何を学ぶのか。こちらが要求する水準さえクリアできるのであれば、それに付け加え（教員にしてみれば）余計なことを学ばれてしまっても、それは学生の任意なのではないか。

今回の「私の授業」を一読し、上のようなことを考えていた。例えば、久武先生はかつて受講した講義で正答に至るプロセスを

当時の教師と共有した経験から、「考え方」を伝える講義の可能性を指摘されている。また、磯谷先生のいう「授業の難しさ」は、多様な能力や習熟度を持っている学生がそれぞれなにを講義に求めているか、というところからきているのではないだろうか。

井村先生の雪上野外運動に参加した感想を読むとスキー技術そのものと同時に、学生は指導者に必要な熱意や資質を学んでいることがわかる。そして直江先生のアートライティングには講義目的以上のものを学生に獲得させようという無意識の「たくらみ」が仕込まれているように感じた。

知識の伝授、という一点に限って言えば、ここ数十年で対面式の講義は学生や彼らのニーズの多様化の中で、かなり効率の悪いメディアになってしまったと感じる。それでもなおこの形式が存続しているのは、単純な伝達モデルに括り込まれない巧まざる余録のようなものを教員、学生双方が講義に期待しているからではないかと考えるのである。